

しかし、それ以前に、仕事面で不満が鬱積していたのだ。

中心部隊についた東京組には、自動車やトラックがついており、物資の補給もあった。しかし大鋸や樋口組にはなんの補給もなく、悪路の徒歩でロクな食事もできなかった。さらに樋口班には無電がなく、一度、依岡班と行きあった時、樋口が書き溜めた原稿の打電を依頼したが、戦況記事はすでに古く、ニュース価値を失っており、送信されなかった。

入城も中央組より一日遅れ、支局に着いてみると、先着組は車を乗りまわし、取材送信に忙しかった。東京組は陽光を浴び、自分たちには日が当たらなかった。このうっぶんが一気に爆発したのだ。

しかし、この種のいさかいは、同盟だけではなかった。朝日も毎日、東京組と大阪組の間に反目し合う空気があった。とくに毎日は、大毎（大阪毎日）、東日（東京日日）と、社名呼称でも違いがあった。両社とも大阪には本社意識が強く、東京には中央意識があった。「一番乗り」とか重要ニュースの取り合いや、装備面での優劣が、しばしば争いを招く理由になった。

この夜は無事に済んだが、「叛乱部隊」に対する支局長・中村農夫の処置はきびしかった。翌十五日には、大鋸、樋口、小坂らは帰還を申し渡され、上海へ去った。

師団長の気焰

私は、車で城内をまわった。住民居住区は「避難民区」とされ、その周辺には警備隊が配置されて

いた。私たちは、旧支局が区内にあるとの理由で中に入った。まだ店は閉じたままだが、多くの住民が行き交い、娘たちの笑い合う姿があり、子供たちが戯れていた。生活が生き残り、平和が息を吹き返していたのだ。私は戦争で荒れた心が和むのを覚えた。そして、ふと、東京では暮れの仕度で忙しいのではないかと思った。

夜、中島師団長から呼びだしがかかる。行政院に近い中央飯店だった。各社の記者二十名が集まる。私たちが食卓を囲んだのは、家具調度とも豪華な部屋だった。料理は、さすが材料が揃わず一級とはいえなかったが、酒は豊富だった。「今夜は入城祝いだ。大いにやろう」と、中島師団長は老酒の杯を高くあげた。そして滔々とぶつ。

「日本は風呂敷を広げすぎた。これ以上広げてはいけない。今後は杭州、広東などの閩門を押さえ、占領地域に独立政権を樹てる。部隊は早く凱旋させて、国費のかさむのを防がねばならない。蒋介石がドイツに泣きついたという話があるが、事実だろう。日本が手を引くべき絶好の時機であることを蔣は知っているからだ。しかし、日本はうかつにドイツの仲介を受け入れてはいけない。ドイツは英国より恐るべき国で、条約など平気で破る。休戦条約は直接蔣と結ぶべきだ。もし戦後工作を失敗したら自分は黙っていない。大砲を持って、どこへでも乗り込んでいく」

戦後に来るものは三国干渉ではないか、と師団長はいう。戦勝の武將の当たるべからざる気焰だった。私は、政府がどのように出先軍団を統御できるのか、不安に思った。